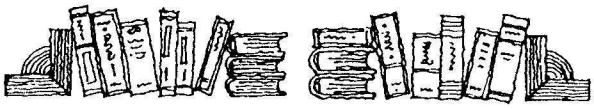
日本女子大学

国語国文学会だより



No. 22　　2000. 3

日本文学科卒業生の会

国語国文学会 平成十一年秋季大会 研究発表・公開講演会 報告

平成十一年十二月四日(土)、国語国文学会秋季大会を八十年館八五一教室において開催した。

◆午前の部（研究発表）十時～十二時

「有島武郎『或る女』
——表象としての田川夫人をめぐって——」
大学院研究生　菅井かをる氏

「風葉の『青春』——欽哉の浪漫主義を巡って」
新30回院23回生　佐藤芳子氏

「日本語授業での『聞き返し』のはたらき
——教師と実習生の比較から——」
博士課程前期一年　吉村直美氏

◆午後の部（講演）十三時～十六時

「宮本百合子『乳房』をめぐって
——ジェンダーとセクシュアリティー」
本学教授　倉田　宏子氏

「文学の向こう側」
作家　高橋　源一郎氏

学外からの参加者十数名を含む会場は、発表者、講師の先生の言葉に一心に聞き入っていた。終了後、生協食堂ウィミンにて懇親会が開かれ、講師の先生方も、講演とはまた違ったくつろいだ雰囲気の中、ワインを傾けながら予定時間を過ぎてもお話がはずみ、やや遅い時刻の終了となった。

講演要旨
「文学の向こう側」

作家　**高橋　源一郎**

●「日本文学盛衰史」

現在、雑誌『群像』に史実を基にしたフィクション「日本文学盛衰史」を連載している。登場するのは二葉亭四迷、石川啄木、夏目漱石、森鴎外、島崎藤村などである。四迷がインド洋の上、船の中でなくなるシーンから始まってほぼ三年間、明治の作家を読む日々が続いている。もともと好きだったが、明治の作家には、現代の我々に通じる何かがあるのではないかと感じている。

●漱石の『こころ』のKは誰か

従来、特定のモデルはいないとされていた『こころ』のKにモデルがあるのではないか、という説を立てた。加藤典洋さん、関川夏央さんと三人で話し合った結論を、私が書いても良いという許可が出たので、以下高橋説ということになる。

まず『こころ』の冒頭に注目した。

「私は常にその人を先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで、本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記

憶を呼び起こすごとに、すぐ『先生』と云いたくなる。筆を執っても心持ちは同じことである。余所々々しい頭文字などはとても使う気にならない。」

「とても使う気にならない」と明記されている頭文字のKというのが後半連発されているのは、「頭文字を解読しろ」ということなのではないか。漱石は、小説の中で繰り返し一つのテーマを書いているのに、具体的なモデルがわからない。鴎外「舞姫」、藤村「姪っ子」などはみな具体的な事件が特定できるが、漱石は隠すのが非常にうまい。うまいだけに、逆に、隠した謎を解いてほしいという気持ちがあって、そのヒントが「頭文字」なのではないだろうか。

さらに、Kの紹介に「二人には同郷の縁故があったのです」「Kは真宗の坊さんの子でした」「Kは医者の家へ養子に行ったのです。それは私達がまだ中学にいる時の事でした」「Kの姓が急に変わっていたので驚いた」という記述がある。漱石の周囲で、この条件にあてはまる人物というと石川啄木である。啄木の本名は石川一だが、生まれたときの名前は工藤一。坊主の息子で、中学校の時に石川家の養子になったのである。

●K－罪の意識

石川啄木は明治四十三年の八月下旬に「時代閉塞の現状」という有名な評論を書いている。不思議なことに、この傑作が啄木の作品の中で唯一未発表のものである。それはなぜか。

この評論は、明治四十三年五月に朝日新聞文芸欄に載った、他の人の評論の反駁文なので、同じ文芸欄に載る予定だったと思われる。当時、文芸欄の責任者だった漱石が執筆を依頼した、ということが考えられるが、確定はできない。ただし、漱石以外の人物が原稿執筆を依頼した形跡もない。漱石と啄木の日記も、原稿の依頼・執筆の時期にあたる明治四十三年の六月から八月の間だけが、欠けている。

八月、啄木が原稿を書き上げた頃に、漱石は「修善寺の大患」で倒れてしまう。この頃、啄木が漱石に連絡をとろうとした証拠が残っているが、漱石は東京に帰っても入院して療養し、戻ってくると今度は啄木が結核で倒れて、結局会っていない。会わないまま啄木は亡くなってしまう。

この年、明治四十三年の六月には大逆事件が起こっている。この事件で、漱石は啄木の評論を掲載することを躊躇したのではないか。Kというのは、そう見てくると、幸徳秋水もK、菅野すが子もKである。書いた物を何かに発表するという事の意味を漱石以上に知っている人はなかったはずで、啄木の評論を掲載しなかったことが大きな罪の意識になったのも当然ではないだろうか。

●二葉亭四迷

今読んでも、現代の問題意識に当てはまるほど不思議な魅力を持っている明治の作家が、鴎外、漱石、啄木、二葉亭四迷である。中でも、二葉亭四迷が一番すごいと思う。明治の優れた作家たちの源にいるのが二葉亭四迷ではないだろうか。

まず、現在の日本語の散文の基本の文体を作ったのが四迷である。四迷の翻訳を読むと、文字だけ現代仮名遣いに変えたら今の言葉とほとんど区別がつかない。それほど革新的な翻訳だった。ところが、近代人の悩みをストレートに反映するような近代的な言葉を作った途端に、その最初の悩みがある意味で解消してしまった。それで、四迷はいったん筆を措く。

その後、自然主義全盛の中、十数年ぶりに書いた「平凡」で、今でいうメタフィクションとかポストモダンということをやってしまう。

四迷だけでなく、言葉への対処の仕方、現実との関わり、政治と文学など、現代の作家が考えているようなことは、皆明治、特に四十三年頃の明治の作家が目指したこととほとんど変わらない。二十一世紀を目前にして、日本の現代文学がどうなるかという話も出てくるが、明治四十三年問題をまだクリアしていないので、今でも同じようなことをやっている。鴎外、漱石、啄木、そして四迷を読み返すことで、現代文学のシーンが一新して見えてくるように思う。

●執筆予定

二千年四月から朝日新聞の夕刊で「官能小説家」という連載を始める。主人公は樋口一葉。明治と現在半々ぐらいになる予定。また、「日本文学盛衰史」の方は、秋口に原稿用紙千枚、約五百五十頁で講談社から刊行される予定である。

「宮本百合子『乳房』をめぐって
―ジェンダーとセクシュアリティー―」

日本女子大学教授　倉田　宏子

一九三五（昭和十）年四月、『中央公論』に中條百合子の筆名で発表した『乳房』は、百合子のプロレタリア作家時代の代表作と位置づけられている。位置づけの高さに比して先行研究は少なく、それらは、「プロレタリア文学の本格的課題の一つに正面からとりくんだ作品」（宮本顕治）として評価する論と、「ありふれた左翼作品」（板垣直子）と否定する論に大別できる。

この対照的な評価のいずれが妥当なのか。そこでまず、小説の成立事情から明らかにすると、小林多喜二の拷問死（一九三三・二）や宮本顕治の検挙（同・十二）、プロレタリア作家同盟の解散（一九三四・二）や転向小説の流行、という厳しい時代状況の中で執筆されたこと、題材となっている東京市電争議と無産者託児所運動が、それぞれ一九三二年十月と一九三三年八月に既に挫折しているにもかかわらず、それらの運動および運動に邁進している人々の姿を描いていることをふまえると、『乳房』は「ありふれた左翼作品」などではなく、強い抵抗精神に貫かれたプロレタリア文学であると評価すべきだろう。

こうしたマルクス主義的世界観に照らした評価のみならず、今日のフェミニズムの視点から読むと、女性の周囲に張り巡らされていたジェンダー支配の構造やセクシュアリティの政治学をきわめてリアルに描破したテクストであることに気づく。『乳房』は、蛇窪無産者託児所を舞台にし、保姆ひろ子を中心に、自分たちの生活と職場を守り、権力と戦っていこうとしている意欲が描かれているが、ひろ子が戦う相手のうち、国家権力と左翼運動の男たちに着目すると、彼らはマルクス主義的階級史観からみて問題であるだけでなく、ジェンダー支配をたくらむ存在としても描き出されている。

国家権力による弾圧は、市電争議や託児所運動を通して戦われていた階級闘争に対する私服刑事や特高刑事たちの陰険で卑劣きわまりない攻撃の赤裸々な描写によって明らかにされている。さらに、産む権利と、産んでも育てる権利を踏み躙られている、ひろ子とお花さんの乳房を描くことによって、母性ファシズムの賞揚とはうらはらに、個人の身体やセクシュアリティまで徹底的に収奪するところにファシズムの本質があると告発し、ジェンダー文化の欺瞞性をも暴き出しているのである。

他方、本来同志であるはずの東京交通労働組合のダラ幹たちは、ひろ子が女であることから、その支援を適当にあしらい、あまつさえ運動の切り崩しに利用しかねないという思想的堕落ぶりを露呈させる。ひろ子はまた、同僚のタミノがハウスキーパーになりそうになったことから、革命運動の中のハウスキーパー制度に異議を唱える。第二次世界大戦後になって、プロレタリア運動のたしかな一翼を担い身命を賭してハウスキーパーとなった女性たちが、運動内部で卑しめられ貶められていた事実が明らかにされたが、これは労働運動、革命運動にさえ根強くあった性差別にほかならない。『乳房』は、革命戦線の男たちさえもが、女性をジェンダーによって支配している実態をリアルタイムで描出している。

総じて『乳房』は、階級的視点によって国家権力と反体制運動内部の退廃に強い抵抗を示しているばかりか、ジェンダーやセクシュアリティの表象をもって、体制側はむろんのこと、反体制運動内部の闇をも抉り出し、ジェンダー支配の構造に迫った女性ならではのプロレタリア文学と評価できよう。とりわけ当時の左翼運動が、保姆とハウスキーパー、すなわち母性と娼婦性という家父長制社会においてステレオタイプ化された女性像に従って女性闘士を分断し、運動のためという大義名分によって献身させるセクシズムが、いわば制度化されていたことを期せずして形象化していて興味深い。

＊研究発表会　発表者募集

・日　　時　平成十二年十一月末～十二月初めの土曜
・発表時間　三十分、質疑十分
・応募資格　本学国語国文学会会員
・応募方法　四百字以内に発表要旨をまとめ、論題とともに申し込む。
・応　募　先　日本文学科研究室
・締め切り　平成十二年九月末頃

◆『国文目白』最新号をご希望の方は葉書で研究室あてお申し込みください。

国文目白　上村悦子名誉教授追悼号目次より

上村悦子名誉教授略歴ならびに著作目録
上村悦子名誉教授追悼記
純真無垢　……青木生子
追慕　上村悦子先生　……秋山　虔
目白訪問記―上村先生の回想……石原昭平
「善意」と「努力」　……木村正中
上村悦子先生を思う　……守屋省吾
上村悦子先生を讃える　……麻原美子
至誠の人　……後藤祥子
上村先生の「英語」　……倉田宏子
気迫とやさしさを遺されて……斉藤令子
語り継ぎ　言い継ぎ行かむ
富士の高嶺は　……田中基子
「上村悦子名誉教授追悼号」によせて
思い出すままに……保志美也子
王朝女流日記
日記執筆時の心情　各日記の虚構　……上村悦子
国会図書館蔵『源語』について……浅野三平
「雁」の詩と「かり」の歌　……岩井宏子
『古今和歌集』雑歌下
菅原の里（981～983）をめぐって
……佐田公子
道綱母の歌人意識
女性歌人における屏風歌詠進の視点から
……高野晴代
『日本霊異記』にあらわれた親子関係を考える
……内藤絢子
『稚児物語』における、僧侶と愛……竹山真知子
摂津源氏と弓箭譚
鵺退治説話の背景にあるもの……須藤真紀
『雨月物語』の一考察
――描写をめぐって　……大角隆子
山東京山『こころえくさ』と『鶴のすさみ』
……津田真弓
『分身』論　――母を求める「分身」
……小林美恵子
小林秀雄「オフェリア遺文」私論
〈意識の流れ〉の小説として……川瀬優美
『愚管抄』における「～ト」型副詞
……田和真紀子
現代人と無用の用
――中国古典『荘子』を現代に生かす
……石井絢子
日本語授業での「聞き返し」のはたらき
――教師と実習生の比較から……吉村直美

◆**会員の著作紹介**

玉藻俳句叢書Ⅸ

「初蝶」　坂正流（旧31）著

昭和五十年より平成十一年まで「玉藻」に発表された句を年代は措き、季節別に収録された氏の第一句集。星野椿氏の序文を得て、氏の生涯の歴史を本道の写生句に託し、俳句の真髄を把えた句集。平成十一年五月玉藻社刊。

著書を刊行された方はお知らせください。

報告　秋の文学散歩――本郷界隈

秋晴れの十月三十日(土)、新妻佳珠子氏（新3・院6）、藤木直実氏（院31）のご案内で、本郷、東京大学界隈の文学ゆかりの場所を歩いた。赤門前から、東大構内の新聞博物館、青山胤道像、ベルツ像、スクリバ像、三四郎池をめぐり東大学食で昼食。弥生門前の立原道造記念館では企画展「物語　春のごろつき」を見学、隣接する竹久夢二美術館、弥生美術館を見学した後、立原道造記念館理事の宮本則子氏（新17）のご案内でこの三つの姉妹館を経営される鹿野琢見氏に、三館設立に至るまでの興味深いお話を伺った。

現在、委員会では名簿更新の準備をしています。連絡先に変更がおありの方はお知らせください。また、年会費（千円）未納の方は納入をお願い申し上げます。

従来、年度二号目の「国語国文学会だより」は、十～十一月頃、秋季大会前に発行しておりましたが、今年から発行を二～三月とし、秋季大会の報告中心に編集することといたしました。ご了承ください。

二〇〇〇年三月一日
発行・日本女子大学日本文学科
国語国文学会卒業生の会
〒一一二―〇〇一五
東京都文京区目白台二―八―一
日本女子大学　日本文学科内